

お寺の周りにツツジ、ハナミズキ、その他様々な花が彩り豊かに咲いております。この季節、改めて恵まれた環境に移転させて頂いたことに感謝いたしております。さて、きれいに咲いた花もやがては散ってゆくように私たちも同じ「無常」といういのちを生きております。

先日、当院の初代総代を引き受けてくださったOさん(あえて実名は控えさせていただきます。)がご逝去されました。町会長、郵便局長など歴任され人望厚い方であったため、私が勤めさせていただいた通夜には400人近くの方々が参拝されました。お寺としても、開所当初からお世話になり、特に今からご相談したいことも多くあったため非常に残念でなりません。

そのお通夜後のお齋(食事)の席で娘様が「どうしてもお伝えしたいことがあります。」と忙しい接待のさなか、わざわざお越しく下さいました。お伝えしたいこととは、Oさん臨終直前におっしゃった最後のお言葉でした。そのお言葉とは、見守るご家族の前で「阿弥陀様と浄土で待っているか

らねえ」そして、その後「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えご往生されたそうです。そのお話を聞き不思議と胸のあたたかくなる思いがしました。「ああ本当に仏様になられたなあ」そして浄土真宗の教えを聞くものの臨終としてはこれ以上の最後はないのでは・・・とも思いました。このOさんの最後のお言葉はいろいろなことを教えて下さいます。

私が強く思ったことは、「やはり生死を超えてゆくよりどころは阿弥陀様しかないのだなあ」と。

私は今47歳という年齢になり「まだまだ人生の折り返し地点だ、いまからいまから！」と自分に言い聞かせる気持をもちながら、以前と比べると体のあらゆるところの衰えを感じつつ、お寺のため、家族のため、そして自分のため・・・日々模索しながらなんとか生活させていただいております。しかし、そのなんとか生きている人生にも遅かれ早かれ必ず終わりがやってきます。そのことは誰もがわかっていながらも最後の状況は実際、予想つくものでもありません。

いのちの予想がまったく

つかない問題のことを「生死の問題・無明・迷い」といいます。

お釈迦様は『仏説無量寿経』の中に私たちの人生を含めもっと広大な「いのち」という視点から人間のありさまを「独生独死、独去独来」(ひとりうまれひとりしに、ひとりさりひとりきたる)私たちのいのちのありさまはまったくもって孤独であり苦しみそのものであると教えて下さいます。しかし、このお経でお釈迦様が一番お伝えしたかったことは、「南無阿弥陀仏」の救いです。その救いとは思い通りにならない孤独という苦しみを受ける場所からの解放です。

それを宗教的な救い、親鸞聖人は真実の救いとおっしゃいます。孤独という苦しみのない真の平等、清らかで限りない光といのちの世界「西方浄土」を阿弥陀仏がちゃんと用意して下さい、だからこそ孤独な今を安心して生き抜くことができます。「南無阿弥陀仏」Oさんの臨終の時のお話で私のこころをあたたかくさせたのも阿弥陀様のはたらかかけでありましょう。

南無阿弥陀仏